

「肥後ごま」

— ちよんかけごま —

昔から正月の遊びとしては、羽根突き、凧上げ、こま回しなどが親しまれてきました。中でもこまには、熊本独特の「肥後ごま」というものがあり、今でも正月子供たちがやっています。



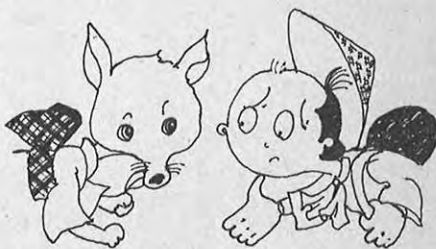
△ちよんかけごまを操る早田さん

また肥後ごまには、今回でも珍しい平たい「ちよんかけゴマ」があります。これは地面で回すこまではなく、独特の紐で下に落ちないように手で操りながら、その曲芸的な妙技を楽しむものです。最近では正月行事の一つとして熊本城内で行われる「ちよんかけごま大会」が熊本市民の人気を集めています。

熊本市出水町に住む早田栄作さんが、ちよんかけごまの名人で、そのこま捌きは見事なもので、見る人の目を魅了します。

「肥後ごま」の持つ素朴な味は、何かに人々に親しみを覚えさせ、民芸品としても高い価値を持っています。

民話



五太どんと万吉狐の話

下益城郡城南町

徳本 明

むかしむかし、隈ノ庄の城の鼻と呼ばれる古い城跡に、万吉という老狐が住んで居たそう。この狐は月がきれいな夜などは美しい娘に化けて、夜遊びの村の若者をからかったり、祝儀帰りの水車小屋のおじいさんから、大切なおばあさんへの土産を失敬したうえ、近くにある幾つか古墳のまわりを、一晩中引つ張り回したりして喜んで居たげな。だがこの悪ごころ狐にも苦手の一つ二つはあるもので、肥後の民話集のなかの「木原村の孫四郎どん」の話はご承知のとおり。丁度そのころ隈ノ庄の町に五太どんと呼ばれている大へんに酒好きで、人のよいバツチョ。笠の行商人が居たそう。雨の日

も、そして風の日も休むことなく下方の村々をめぐる、どこかの出小屋でちよんと一杯ひっかけ、ほろよい加減でこの城の鼻の堀割道を通るのが日課であったげな。ところがある秋の夕方、この堀割道で偶然に万吉狐が可愛い村娘に化けている現場に出会ったのがこの話の発端です。

「こらア大したもんばい。よーしこの俺様がちよん万吉ばだましてやろうばい。」と悪計をめぐらして、娘にうまく話を持ちかけ隈ノ庄の町まで同行することになったげな。町なかに入ってから、ある家の前までくると娘は、「こまに叔母が嫁いでいますので、一言挨拶を！」と、五太どんを表に待たして立ち寄ったまま、なかなか出てこないそう。すたすた。しびれをきらした五太どんは、そつと裏口に回り、声をかけたが返事がないので、戸を開け居間の障子を指につばをつけて穴をあけて、顔をひっつけてのぞいたが中は真っ黒で何も見えんそう。ところがいきなり頭を「グワン」と目から火が出るほどなぐられて、「あんたは、何ぼしょつとな。」という大きなどなり声に「ハッ」と、五太どんが正気にかえってみしたら、農家の馬小屋の中で、馬の尻の穴を一生懸命のぞいていたげな。まったく恥しい話で五太どんの悪だくみはこれでオジャンで幕、五太どんが狐にだまされたことが町の大評判になりましたとさ。

この人と30分

このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

闘う歌人

宮本旅人

戦雲急をつけようとする昭和十四年、人気歌手ディック・ミネが唄って人々の心をとらえた歌「旅姿三人男」の作詞家宮本旅人さんの歌碑が去年の十一月郷里の菊陽町に建った。

碑には前記「旅姿三人男」の詞文とともにふるさとを歌った最近作
長かりし流転の旅のはてにして
たどり着きたるこゝはふるさと
が刻まれている。

宮本さんの辿られた七十年の人生は、作品にみられるとおり、男の意地をかけた闘いの連続であり、又、真理を求めた流転の旅路ではなかったか。

現在、千葉県船橋市の静かな自宅で好きな絵をかきながら悠々自適の生活を送っておられるが「余生は、やっぱり郷里の熊本で暮らしたかです」と達者な熊本弁で、熊本のことをなつかしうおられた。氏の代表作品としては、短歌二〇〇首が編集されている歌集「流転」と柔道小説「黒帯風雲録」等がある

失恋と歌

私の生れは江田村、現在の菊水町ですが、郷里ということになると、四歳から二十三歳まで育った母の里の菊陽町です。

昔の津田小学校を出て、熊中、今の熊高ですね、ここに入学したんです。当時、私の小学校から十七八人が熊中の試験を受けました。私は数学が苦手担任の先生も、「お前はとてんだめだ」と言われるので、他の学校の入学願書を持って試験発表を見にいったんです。ところが、合格したのは私一人なんです。後で分ったことなんです。数学以外は百点満点だったそうです。職員会議でとりあげられて、面白いから入れてみるという事になったらしいです。在学中も数学はやっぱりだめですね。でも、どうにか無事卒業できました。

中学を出てからは、おじが医者をしていましたので、京都の医科大学を受けてはみましたが、理数系が苦手ときていますからね、問題になりません。それで、師範学校にいて学校の先生になったんです。

丁度師範にいく頃ですね、短歌に興味を持ったのは、病みつきになったきつかけはね、噂の前では冷や汗が出ますが、失恋したんです。惚れた女が養子ぐち、私が一人息子なので悩んでいると、若山牧水先生の直弟子で黒木伝松という人が

